

ヨブ記19章23-27節

テサロニケの信徒への手紙二2章13節-3章5節

ルカによる福音書20章27-38節

本日の旧約日課は、ヨブ記です。長いヨブ記のほんの一部ですが、25、26節は、葬送式の聖語として用いられる箇所です。26節の「**私の皮膚がこのように剥ぎ取られた後、私は肉を離れ、神を仰ぎ見る**」が、復活を想起させるからでしょう。「仰ぎ見る」と訳されている言葉は、単に見るのではなく、「凝視する、知覚する」というような意味です。新共同訳と口語訳では、「見るであろう」と未来のように訳されていましたが、新しい聖書協会共同訳では、「見る」と断言するように訳されています。この箇所についてのヨブ記自体の解釈は様々ですが、イエス様を通して復活の希望を与えられているわたしたちにとっては、旧約においても、復活の予型のような文言はあると受け止めたいと思います。

本日の福音書は、その復活について、サドカイ派の人々がイエス様に質問をするお話です。皇帝への税金についての質問に続き、「さて、復活はないと言っているサドカイ派のある者たちが近寄って来て、イエスに質問した」（ルカ20:26）とお話は始まります。お話を始める際に、様々な情報を前もって伝えるルカ福音書の特徴らしく、サドカイ派が復活を信じていない人々であるという情報を伝えています。以前の日課では、28節から33節までが《》に入っていましたが、新しい日課ではその部分も読むように指示しています。その部分にあるのは、「申命記」25章5節以下にある「家名の存続」についての規程を基にした質問です。その規程とは、兄弟が一緒に暮らしていて、結婚している兄が子をもうけずに死亡した場合、弟は、その兄嫁と結婚して子どもをもうけなければならない。ただしその子どもは長男の子どもとするという規定です。復活ということがもしあるならば、理性的に考えて、このような事例はどうなるのでしょうかというのが質問の主旨です。復活についてのこのような質問、あるいは疑問は、現代でも起こります。言い方を変えれば、復活という現象を理性的に認識しようとする、時代や文化に関係なく、このような疑問が常に起こるのです。

この質問に対するイエス様の答え、「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活の子として神の子だからである。」（ルカ20:34-36）は、根拠をもって答えているのですが、あまり論理的ではありません。復活にふさわしい人々は、結婚しないからそのような問題は起こり得ないと単に答えているからです。また根拠も、「もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活の子として神の子だから」（ルカ20:36）ということです。「もはや死ぬことがない」は、直訳すれば「もはや死ぬことができない」です。「天使に等しい者」は、『聖書』では、ここでしか用いられていない言葉ですが、「(天使ではないが) 天使相当」というような意味です。「復活の子として」は直訳に近く、前の訳では

「復活にあずかる者として」となっていました。「神の子」は、「神の子イエス・キリスト」と同じ表現ですが、「子」は複数形です。イエス様の答えは、平たく言えば、復活とは、天使ではないが天使相当の存在になり、イエス様と同じような神の子となるということであり、生前？の婚姻関係は関係ないということです。このイエス様の説明は、復活の姿が、現在の姿とは異なることを強調しているのですが、サドカイ派の疑問に具体的に答えているようには思えません。

イエス様はさらに「死者が復活することは、モーセも『柴』の箇所、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、明らかにしている」(ルカ 20:37)と説明を続けるのですが、おそらく「出エジプト記」の3章6節、15節のことを想定していると思われます。現在の『聖書』では、それぞれ「さらに言われた。『私はあなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。』モーセは顔を隠した。神を見るのを恐れたからである。」(出エ 3:6)、「重ねて神はモーセに言われた。このようにあなたはイスラエルの人々に言いなさい。『あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が私をあなたがたに遣わされました。』これこそ、とこしえに私の名、これこそ、代々に私の呼び名。」(出エ 3:15)です。イエス様には申し訳ないのですが、この引用も復活についての直接的根拠とは思えません。先のヨブ記を引用したほうがよかったのではないかと思います。しかし、聖書日課には省略されていますが、ルカ福音書のお話としては、「律法学者の中には、『先生、おっしゃるとおりです』と言う者もいた。彼らは、もはや、あえて質問することはなかった」(ルカ 20:39-40)と終わります。周囲の人々は、イエス様の答えで納得したとなっているのです。

なぜ周囲の人々は納得できたのか、それは日課の後にある「律法学者の中には」という表現にヒントがあります。もし彼らがモーセ五書しか大切にしないサドカイ派ではなく、『聖書』全体を大切にしようとしているファリサイ派の律法学者たちだとすると、『聖書』全体から考えれば、イエス様の答えは論理的であり根拠のある事柄にほかならないからです。

わたしたちが信じている神様は、人間の悲しみや苦しみ、あるいは死を平然と見過ごすような方、あるいはそれらがあることを当然とするような方ではありません。人間の罪を問う方ではありますが、莫大な慈しみ愛を注がれる方です(出エ 20:5-6)。この世界の初めからその造られた全てを大切に、本来は死すら最初には想定していない方です。主なる神様が創造された世界は、神様と造られたものの全てが調和を保ち、平安の内に過ごせる世界であったのです(創世 1 から 2 章)。だからこそイエス様は、「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きるからである」と断言するのです。本来あるのは、ヨブ記が記すように、生きている人間が主なる神様をしっかりと仰ぎ見ることのできる世界なのです。

イエス様の復活、そしてそこにある希望を一言で示す福音という言葉、それは全く新しい現象、事柄ではありません。『聖書』の神様は、最初から復活も天国も想定されていた、否、想定する必要もない平和の世界をわたしたちに与えてくださっていたのです。イエス様を通して神様を信じる人がいる限り、この世界にどれほどの混乱があつたとしても、希望は無くなりません。希望を伝える人として、また教会としてこれからも歩みたいと思います。